

ふるさとファイル



昭和の戦争と 地域のくらし

展示コーナーだより
第47号
平成23年7月
生涯学習課文化財係



展示期間

平成23年7月2日(土)

～10月2日(日)

※図書館休館日を除く

※期間中、展示史料の変更を行う予定

昭和6(1931)年の満州事変の勃発とともに、長い戦争の時代が始まります。とくに昭和12年の日中戦争の開始以後は、物資が不足し、日常生活にもさまざまな影響がでてきました。

また、働き手である成人男子が兵士として出征し、慢性的な労働力不足のなかで、農村では食糧の増産や供出の要請に応じなければなりません。

今回の展示では、市内に伝わる歴史資料からこの時代の地域のくらしの様子をご紹介します。



食料増産と供出

戦争の長期化とともに、日本中が食糧不足に陥りました。政府は食糧の増産と供出制度を実施し、各農家の実収量と家族数を基準に供出量が割り当てられました。また、学校の校庭にも甘藷(サツマイモ)が植えられました。

今里地区では、昭和17(1942)年、青年会が食糧増産のために今里大塚古墳を利用して甘藷をつくることを計画し、議論の末、古墳上部の約100坪を開墾して甘藷の苗が植えつけられました。



今里大塚古墳にて甘藷の収穫(昭和17年、今里自治会所蔵)



勤労奉仕

農家は、大切な働き手である青壮年男子を戦地に送り、さらに食糧増産の要請にも応えなければなりません。それに代わる労働力として子どもたちが動員され、働き手のいない農家へ派遣されました。

また、村に残った未婚女子も、女子挺身隊として軍需工場での労働に従事し、兵器の増産にあたりました。



稲収穫時に勤労奉仕をする神足小学校勤労奉仕団
(昭和15年頃 神足小学校所蔵資料)

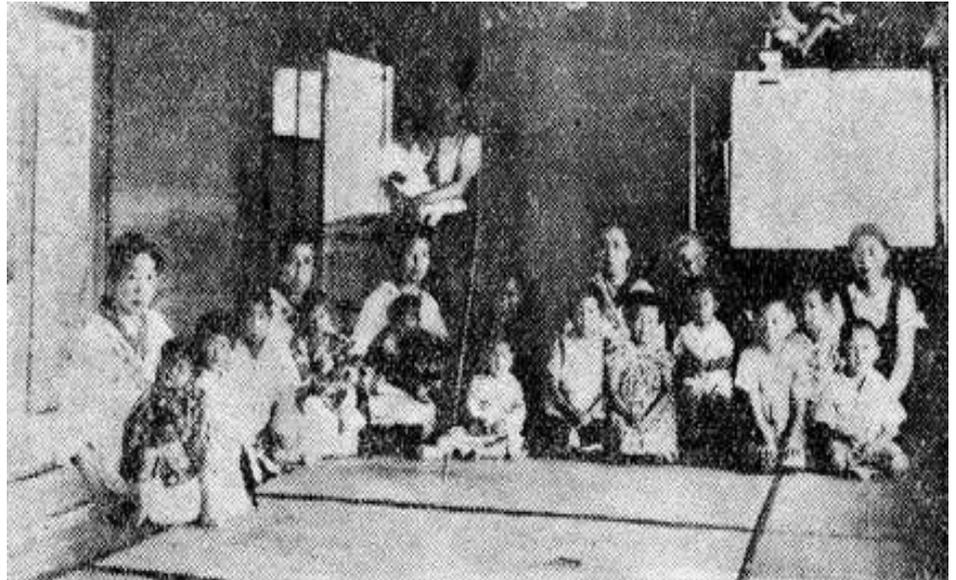


共同保育

労働力不足に陥った農村の食糧増産対策を支援するため、共同保育をはじめ、共同作業・共同炊事も奨励され、農繁期の能率向上が図られました。

特に「共同保育」は盛んに行なわれ、農繁期に限り非農家婦人の応援を得て、村内の寺社や事務所で開設されました。

長岡京市域でも、新神足村で各区単位に共同託児所が開設されたことが昭和 18 年 6 月 20 日付の京都新聞で報じられており、乙訓村では、農繁期に「幼稚園」を開設するという案内が出されています。また、海印寺村では昭和 19 年から下海印寺の阿弥陀寺において「農繁期託児所」が設けられ、当時の記録が地域に残っています。



勝龍寺の季節託児所
(昭和 14 年、
『神足月報』第 35 号より)

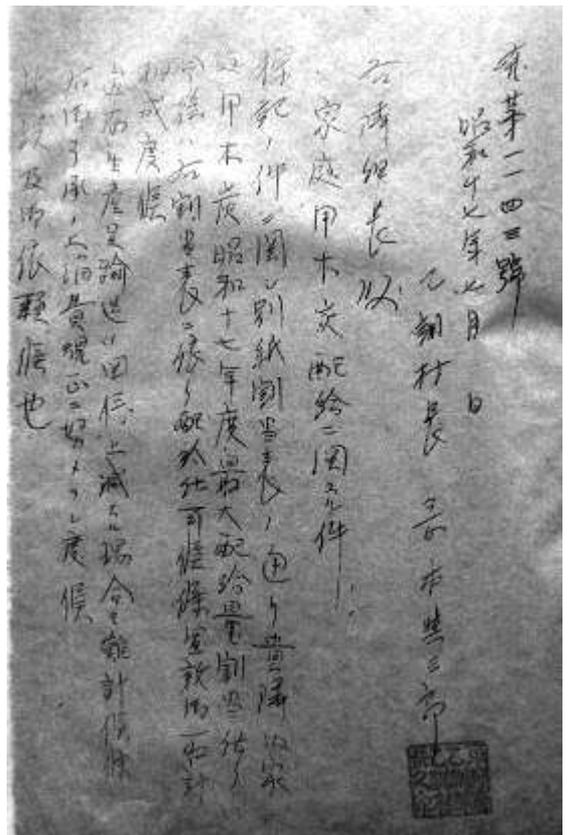


配給

戦争の長期化は、物資の不足をもたらしました。昭和 13 年、政府は国家総動員法を制定し、あらゆる物資の生産、価格、流通の統制を行ない、戦争の影響が国民生活全般に広がっていきます。

昭和 17 年からは、みそやしょうゆ、衣料品など日用品の購入が厳しく制限され、購入切符や通帳による配給が実施されました。これらの配給切符は、地域の部落会を通じて配布され、購入切符がなければお金はあっても購入することができませんでした。

このほかにも、病人用の鶏卵、軍手、地下足袋、砂糖、メリケン粉、マッチ、てんぷら油、たばこ、焼酎など、さまざまな品目の配給に関する記録が今里区に残っています。



木炭配給の通知
(昭和 17 年 7 月、今里区有文書)